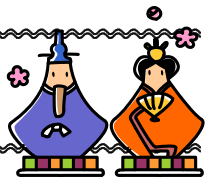
校長室だより

防府市立牟礼中学校
R３．３．１



学問のすすめ～福沢諭吉～

校長　田中　俊光

日本人の誰もが「福沢諭吉」と聞けば、顔を思い浮かべることができます。１万円札に顔写真が印刷してあるからです。「何をした人？」と問えば「慶應義塾大学をつくった人」と答えます。「どんな本を書いた人？」と問えば、「学問のすすめ」と答え、その冒頭「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」と言い始めます。でも、「その続きは？」と問うと「…」、「読んだことある？」と問うても「…」。皆「平等」について書いてある本だと思っています。日本人の誰もが知っているが、深くは知らない不思議な人物、不思議な本です。

「学問のすすめ」は、1872（明治５）年から1876（明治９）年にかけて全17編の分冊として発行され、1880（明治13）年に合本し一冊の本として出版されました。合本の前書きによると、初編の発行以来９年間で70万冊も売れ，当時の大ベストセラーでした。今回の校長室だよりでは、「学問のすすめ」の初編「学問には目的がある」を紹介します。

「学問のすすめ」　　初編「学問には目的がある」

１　人権の平等と学問の意義

「**天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず**」と言われている。

つまり、天が人を生み出すに当たっては、人はみな同じ権理（権利）を持ち、生まれによる身分の上下はなく、万物の霊長（霊妙な力を備えていて、他の中で最もすぐれているもの）たる人としての身体と心を働かせて、この世界のいろいろなものを利用し、衣食住の必要を満たし、自由自在に、また互いに人の邪魔をしないで、それぞれが安楽にこの世をすごしていけるようにしてくれているということだ。

しかし、この人間の世界を見渡してみると、賢い人も愚かな人もいる。貧しい人も、金持ちもいる。また、社会的地位の高い人も、低い人もいる。こうした雲泥の差と呼ぶべき違いは、どうしてできるのだろうか。

その理由は非常にはっきりしている。「実語教」（平安時代末期から明治時代初期にかけて普及していた庶民のための教訓を中心とした初等教科書）という本の中に、「**人は学ばなければ、智はない。智のないものは愚かな人である**」と書かれている。つまり、賢い人と愚かな人との違いは、学ぶか学ばないかによってできるものなのだ。

また、世の中には、難しい仕事もあるし、簡単な仕事もある。難しい仕事をする人を地位の重い人と言い、簡単な仕事をする人を地位の軽い人と言う。およそ心を働かせてする仕事は難しく、手足を使う力仕事は簡単である。だから医者・学者・政府の役人・また大きい商売をする町人、たくさんの使用人を使う大きな農家などは、地位が重く、重要な人と言える。

社会的地位が高く、重要であれば、自然とその家も富み、下のものから見れば到底手の届かない存在に見える。しかし、そのもともとを見ていくと、ただその人に学問の力があるかないかによって、そうした違いができたわけであり、天が生まれつき定めた違いではない。

西洋のことわざにも、「**天は富貴を人に与えるのでなく、人の働きに与える**」という言葉がある。つまり、人は生まれたときには、貴賤や貧富の区別はない。ただ、しっかり学問をして物事をよく知っているものは、社会的地位が高く、豊かな人になり、学ばない人は貧乏で地位の低い人になる、ということだ。

２　役に立つ学問とは何か

ここでいう学問というのは、ただ難しい字を知って、わかりにくい昔の文章を読み、また和歌を楽しみ、詩を作る、といったような世の中での実用性のない学問を言っているのではない。た

しかにこうしたものも人の心を楽しませ、便利なものではあるが、昔から漢学者や国学者などの言うことは、それほどありがたがるほどのことでもない。

昔から漢学者に社会生活が上手なものは少なく、また和歌が上手(うま)くて、かつ商売が上手(うま)いという人はまれだ。このために、心ある町人や百姓は、自分の子が学問に一生懸命になるのを見て、やがて家の財産を失ってしまうだろうと、親心として心配するものもある。これは当然のことだ。こうした学問が実用に役立たず、日常生活には使えないあかしであるからだ。

そうだとすれば、いま、こうした実用性のない学問はとりあえず後回しにし、**一生懸命にやるべきは、普通の生活に役立つ実学(じつがく)である。**たとえば、いろは47文字を習って、手紙の言葉や帳簿の付け方、そろばんの稽古(けいこ)や天秤(てんびん)の取り扱い方などを身につけることをはじめとして、学ぶべきことは非常に多い。

地理学とは、日本国中だけでなく、世界中の国々の風土の案内をしてくれるものだ。物理学というのは、この宇宙のすべてのものの性質を見て、その働きを知る学問である。歴史学とは、年代記を詳しくしたもので世界の歴史のようすを研究するものだ。経済学というのは、個人や一つの家庭の家計から世の中全体の会計までを説明するものである。修身学とは、行動の仕方を学び、人との交わり方や世間での振るまうべき自然の「道理（倫理)」を述べたものである。

こうした学問をするにあたっては、西洋の翻訳(ほんやく)書を調べ、だいたいのことは漢語を使わずにできるだけやさしい言葉で対応すべきである。もしくは、若くて学問の才能があるものについては、西洋の原文を読ませる。それぞれの学問では事実を押さえて、物事の性質を客観的に見極め、物事の道理をつかまえて、いま現在必要な目標を達成(じつがく)すべきである。

こういった学問は、人間にとって当たり前の実学であり、身分の上下なく、みなが身につけるべきものである。この心得があった上で、士農工商それぞれの自分の責務を尽くしていくというのが大事だ。そのようにしてこそ、それぞれの家業を営んで、個人的に独立し、家も独立し、国家も独立することができるだろう。

３　自由とはわがままのことではない

学問をするには、なすべきことを知ることが大事である。人が生まれたときには、何にも繋(つな)がれず縛(しば)られず、一人前の男は男、女は女として、自由ではあるけれども、ただ自由とだけ言って「分限（義務)」を知らなければ、わがまま放題になってしまう。その**分限とは、天の道理に基づいて人の情にさからわず、他人の害となることをしないで、自分個人の自由を獲得する**ということだ。

自由とわがままの境目というのは、他人の害となることをするかしないかにある。たとえば、自分のお金を使ってすることなら、酒や女遊びにおぼれてやりたい放題やっても、自由であるからかまわない、というように思えるかもしれないけれども、決してそうではない。ある人がやりたい放題やるのは、他の人の悪い手本になって、やがては世の中の空気を乱してしまう。人の教育にも害になるものであるから、浪費したお金はその人のものであっても、その罪は許されないのだ。

４　国家の独立とは何か

自由独立ということは、個人だけのことではなくて、国においても言えることだ。この日本はアジアの東の島国であって、昔から外国と交わりを結ばなかった。自国の産物で自給自足していたが、嘉永(かえい)年間（1848～54）にアメリカからペリーが来て外国との交わりがはじまった。そして今日に至ったわけだ。なお、開港した後でも、「鎖国」や「攘夷(じょうい)」などと、うるさく言っていたものもいるが、たいへん狭いものの見方であり、ことわざに言う「井の中の蛙(かわず)」のようなものだ。こういう議論はとるにたらない。

日本といっても、西洋諸国といっても、同じ天地の間にあり、同じ太陽に照らされ、同じ月を眺めて、海を共にし、空気を共にし、人情が同じように通い合う人間同士である。こちらで余っているものは向こうに渡し、向こうで余っているものはこちらにもらう。お互いに教え学びあい、恥じることもいばることもない。お互いに便利がいいようにし、お互いの幸福を祈る。

「天理人道（天が定めた自由平等の原理)」にしたがって交わり、合理性があるならばアフリカ

の黒人奴隷の意見もきちんと聞き、道理のためにはイギリスやアメリカの軍艦を恐れることもない。国がはずかしめられるときには、日本国中のみなが命を投げ出しても国の威厳を保とうとする。これが一国の自由独立ということなのだ。

中国人のように、自国よりほかに国がないように思い、外国人を見れば「夷狄夷狄（野蛮人め！）」と呼んで動物のように扱い、これを嫌い、自分の力も客観的に把握せずに、むやみに外国人を追い払おうとして、かえってその「夷狄」に苦しめられている「アヘン戦争など」という現実は、まったく国として身のほどを知らないところからきている。個人の例で言えば、自由の本質をわきまえないでわがまま放題におちいったものといえるだろう。

５　新しい時代の新しい義務

王政復古・明治維新以来、この日本の政治スタイルは大きく改まった。国際法をもって外国に交わり、国内では人々に自由独立という方針を示した。具体的には、平民へ名字を持つことを許し、馬に乗ることを許したようなことは、日本はじまって以来のすばらしいことだ。士農工商の位を同等にする基礎がここでできた。

これからは、日本中ひとりひとりに生まれつきの身分などどいったものはない。ただその人の才能や人間性や社会的役割によって、その位というものが決まるのだ。たとえば、政府の官僚を軽んじないのは当然だが、それは**その人の身分が尊いからではない。その人がその才能や人間性でその役割をつとめ、国民のために尊い国の法律を扱っているからこそ敬意を払うのだ。**個人が尊いのではなく、国の法律が尊いのである。

旧幕府の時代には、東海道に「御茶壺」が通るときには、みなその前に土下座した。将軍の鷹は人よりも大事にされた。幕府が使う馬には、往来の人も道を譲った。すべて「御用」という二字をつければ、石でも 瓦 でもおそろしく尊いものに見えてしまっていた。

世の中では、ずっと昔からこうした馬鹿げたことを嫌ってはいたが、しかし、自然にそのしきたりに慣れてしまったのだ。上はいばり、下は卑屈になるという見苦しい社会的な空気を作っていた。これらの慣習自体が尊かったのではなく、茶壺などの品物が尊かったわけでもなく、単に政府の威光で人をおどして、人々の自由を 妨 げようとする卑 怯 なやり方である。内容のないただの空いばりだった。

今日に至っては、全国的にこうしたあさましい制度や社会的な空気といったものはないはずである。したがって、みな安心して、仮に政府に対して不平があったら、それを抑えて政府をうらむより、それに対する抗議の手段をきちんととって遠慮なく議論をするのが筋である。天の道理や人の当たり前の情にきちんと合っていることだったら、自分の一命をかけて争うのが当然だ。これが国民のなすべき義務というものである。

６　恐れず行動せよ

一人の人間も、一つの国も、天の与えた道理というものに基づいて、もともと縛られず自由なものであるから、そうした一国の自由を 妨 げようとするものがあったら、世界のすべての国を敵にしても恐れることはないし、個人の自由を 妨 げようとするものがあれば、政府の官僚に対しても、遠慮するすることはない。ましてや近頃は四民平等の基本もできたことなので、みな安心して、ただ天の道理にしたがって思う存分に行動するのがよい。

とはいえ、人にはそれぞれの社会的役割や才能というものがある。才能や人間性を身につけるには、物事の筋道を知る必要がある。それを知るためには、文字を学ばなければならない。だから、現在学問が緊急に必要とされているのだ。最近のようすを見ると、農工商の身分はかつてより百倍も地位が上がり、士族と肩を並べる勢いになっている。その農工商の出身であっても、人物が優れていれば政府に採用される道も開けている。だから、自分の社会的役割をきちんと認識し、その重さを考え、卑しいことはしないようにすべきである。

７　ひどい政府は愚かな民が作る

世の中で学問のない国民ほど哀れで憎むべきものはない。知恵がないのが極まると恥を知らなくなる。自分の無知のゆえに貧乏になり、経済的に追い込まれたときに、自分の身を反省せずに金持ちをうらんだり、はなはだしくなると、集団で乱暴をするということもある。これは恥知ら

ずであり、法を恐れない行為である。世の中の法律を頼りにして、身の安全を保って社会生活をしているにもかかわらず、依存するところは依存しておきながら、都合が悪くなると自分の私利私欲のために法律を破ってしまうやつがいる。矛盾していないだろうか。

もともと家柄がよく、財産があるものも、お金を蓄えることは知っていながら、自分の子どもや孫をきちんと教育することを知らない。きちんと教育されなかった子どもたちが、また愚かになっていくことも不思議ではない。そうした人間は、やりたい放題をするようになって先祖から受け継いだ財産をすぐになくしてしまう。こうした愚かな民を支配するには、道理で諭しても無理なので、威力でおどすしかない。

西洋のことわざにある「**愚かな民の上には厳しい政府がある**」というのはこのことだ。これは政府が厳しいというより、民が愚かであることから自ら招いたわざわいである。愚かな民の上に厳しい政府があるとするならば、**よい民の上にはよい政府がある**、という理屈になる。いまこの日本においても、このレベルの人民があるから、このレベルの政府があるのだ。

もしも、国民の徳の水準が落ちて、より無学になることがあったら、政府の法律もいっそう厳重になるだろう。もし反対に、国民がみな学問を志して物事の筋道を知って、文明を身につけるようになれば、法律もまた寛容になっていくだろう。法律が厳しかったり寛容だったりするのは、ただ国民に徳があるかないかによって変わってくるものなのである。

厳しい政府を好んで、よい政治を嫌うものは誰もいない。自国が豊かになり、強くなることを願わないものはいない。外国にあなどられることをよしとするものもいない。これは人の当然の感情である。

いまの世の中に生まれて、国をよくしようと思うものは、何もそれほど苦悩する必要はない。大事なことは、人としての当然の感情に基づいて、自分の行動を正しくし、熱心に勉強し、広く知識を得て、それぞれの社会的役割にふさわしい知識や人間性を備えることだ。そうすれば、政府は政治をしやすくなり、国民は苦しむことがなくなり、お互いに責任を果たすことができる。そうやってこの国の平和と安定を守ることが大切なのだ。私がすすめている学問というものも、ひたすらこれを目的としている。

── はしがき ──

7　本書の成り立ち

本編は、私の故郷の中津に学校を開くにあたって、なぜ学問をすべきなのかということを、古くからの友人たちに示そうとして書いたものである。

ある人がこれを見て「この本を中津の人だけに見せるのはもったいないから、広く世間に公表してその益を広げるのがよいのではないか」というすすめがあったので、慶應義塾で印刷して、慶應義塾の同志に見せることにしたのである。

明治４年 未 12月　　福澤　諭吉　小幡篤次郎　記　（明治５年２月出版）

（現代語訳「学問のすすめ」福沢諭吉 著　斉藤孝 訳 ちくま新書）

解説には、次のように書いてありました。

北里柴三郎の伝記（山崎光夫著「北里柴三郎」下巻　中公文庫）に、北里がドイツ留学から帰国した際に、福澤諭吉の援助を期待して面会しに行く話があります。

その際、奥さんに「福澤先生はどういう先生か」と聞いたら「あなた知らないの？」と言って、「これは大変な先生で『学問のすすめ』という本はみな読んでいるわよ。私も読んだから、あなたも読みなさい」と薦められたので、それを読んで、一説を福澤の前で全部暗唱したところ、信頼を得たという逸話が残っています。

北里柴三郎も有名な人物です。医学者で「日本の細菌学の父」として知られています。北里大学をつくった人物です。この逸話を読んで、「妻にこう言われる夫になりたいな」と私は思いました。